

將來に想ふ

身延山短期大学長 深見 日圓

私の学歴をと、若し問ふ人があれば、日蓮宗才四区宗学林から中檀林を経て、東京二本榎の大檀林の課程を履修し其の間内外の学を少しばかり拾ひ喰ひしたとお答へする以外にはありません。呼名は異つて居つても大檀林といふのは今日の大学に匹敵するのもかも知れないが、省みてあれもやつたこれも読んだといふ丈であつて、それが自分の学として掌握されたかと云はれると面耻しい様な気がするのであります。然し其の学窓に学び得た事柄が爾後五十余年間の私の土台となつて居るのであります。

それを想ふと、宗門子弟には漏るゝ所なく学窓に於ける研鑽の時を与へたいと若い頃から念願し、直接間接に宗門教育の面に力を致したつもりであります。意余つて力足らざるを慨いて居ります。

祖山の教育機関と直接の連繋を持つに至りましたのは昭和十八年からであります。時恰も国家の激変時に際り、学校教育も亦一大変転を見たのであります。其の間山の内外の非常なる協力に依つて蝸の歩みの感はありますが、徐々に内外の充実を見て居る事は有り難い事でありませぬ。然し将来宗門の柱となるべき人材を教養すべき機関としては、実にお耻しい状態であります。本年は私の米壽の報恩記念事業として、御廟の備整に全力を傾けたいと思ひますが、つゞいて此の御廟を守り、宗風宣揚の和党を生む母体たる学校の整備・拡充を計る事に希望をつなぐを念願とし、嘗て西谷の御聖廟に近い殆んど全域が学棟に依つて埋もれた如くに、東谷の一部から寺平に亘つて学棟の櫛比する状を諒に画いて居ります。